

トーマス・フリードマン著「レクサスとオリーブの木」を読む

- ナショナル・アイデンティティとは何かを考える -

わたしは日本にマクドナルドがあるのはよいことだと思うし、ベセスダの自宅近くに寿司バーがあるのもよいことだと思う。日本人の女の子がマクドナルドを気に入っているのは嬉しいし、自分の娘たちが寿司を気に入っているのも嬉しい。だが、重要なのは、日本人の女の子がマクドナルドを日本のものだと思い込まされて好きになるのではなく、異質なものとして好きになってくれることだ。そうでないと、均質化は、すぐ目の前に迫っている。そうでないと、ついにはこの日本人の女の子が真に日本的なものを見失ってしまい、前述の細胞と同じで、ある日気がつくと、自分が侵略されていて、本来の姿や文化は何も残っていないということになる可能性は大きい。

下巻 P.75 ~ 76

トーマス・フリードマン著「レクサスとオリーブの木」草思社 2000年2月25日刊

- 2006年10月15日記 -